

## 「神の杜」に寄せた相聞の歌

2021.5. 太田蓉子

「万葉集」には、神社、杜もりや御神木に寄せて詠んだ歌が数多く見られます。その中には、私的な恋の悩みを歌にするのに、神聖な「神の杜もり」を引いて詠んでいるものがあります。そんな歌を選び出して見ると、殆どが、『古今相聞往来歌類』(巻十一、十二)にありました。いずれも作者不明、男の歌とも女の歌ともとれる歌でした。また、それらの歌における「神の杜」は、現在も同じ場所に神社が存在するのです。そこで、詠み手たち男女の感情や思い入れを、詠まれた神社との関連において、探ってみました。

先ず、「歌」を挙げます。次に、詠まれている神社の来歴を、現在・創建時・万葉時代と延喜式・神名帳(927年)における記載に分けて、調べたことを記します。

(神社はいずれも、奈良県内に在った。)(天皇についての記述は、「日本書記」を資料とした。)尚、「社やしろ」は“神が降りる壇、それを設けた建物”を言いますが、本来その周囲の木立・杜もり)に神が宿るものと信じていた故か、「社」と「杜」を区別して詠んでいるとは見えません。(「神社」と記して、「もり」と訓読する例もある。(1344番))

本文では、“神が宿る木立と社やしろ、”の意味で、「神の杜もり」と記します。

- 「石上いそのかみ 布留ふるの神杉 神かむさびて  
恋をも我れは さらにするかも」(2417番・柿本人麻呂歌集)

(石上 振 神杉 神成 恋 我 更 為 鴨)

(巻10-1927番に類歌。人麻呂自身の、布留山の瑞垣に譬えた類歌も、

巻4の「相聞」501番にある。)

- \* 石上の布留の杜の神木の杉木立は、どれも古く神々しいが、私も、古めかしいこの年になって、今更ながら恋をしています。

### 石上布留の杜

- ・石上いそのかみ神宮一天理市布留町(旧・山辺郡)(天理教会本部がある丹波市町と接する)布留山の北西麓。境内は今も巨大な樹木に囲まれている。
- ・布留遺跡では、4世紀のものに巨大集落があり祭祀遺構も見つかっている。物部氏の拠点集落であったと見られ、4世紀後半から6世紀初めの古墳も多数。神宝の「七支刀」は、銘文より百濟王から贈られた369年製の剣と見られ、(15代)神功皇后記にある「七枝刀」と見る説が有力。(現・石上神宮が、所蔵)
- 10代崇神天皇記には、物部連の先祖の人を神職にしたとある。(石上神宮由緒では、この時代に、布都御魂ふつのみたま大神(神武天皇の剣の霊)を祀ったと言う。)
- 17代履中天皇記には、天皇が、父・仁徳天皇崩御の後、弟と争って難波から大和へ逃れた時に、「石上の振神宮ふるのかみみや」へ行かれたとある。(雄略天皇記にも。)

5世紀には既に、大和王権の直轄と言える「神宮」であったと見られる。

- ・飛鳥時代、物部氏が神宮において管理していた各氏族の神宝を、それぞれの子孫に返還させる(天武天皇記)。(物部氏と諸氏族間の連携を弱めようとしたか。)以後、大社ではあるが「神宮かみみや」とは呼ばれない。

(「石上坐布都御魂ふつのみたま神社」、通称、「石上社」「布留社」)  
物部氏は、その後、「石上いそのかみ」の氏を名のるようになり、祭祀にあたる。『名神大社』として記載されている。

○「天あま飛ぶや 軽かるの社やしらの 斎いはひ槻つき

幾代いくよまであらむ 隠妻こもりつまそも」 (2656番)

(天飛也 軽乃社之 斎槻 幾世及将有 隠妻其毛)

- \*空飛ぶ雁ではないが、軽の社の神木の槻の木がいつの世までもあるように、私は(あなたは)、一体いつまで忍び妻でいるのでしょうか。

軽の社

- ・春日神社一檀原市大軽町(旧・高市郡)「応神天皇軽島豊明宮跡」の碑があるが、小さな神社。軽寺(飛鳥時代の創建)の跡に建てた寺・法輪寺が、隣接。
- ・「軽かる」の地は、広い地域に及ぶ。(檀原市大軽町、石川町、五条野町と見瀬町の一部)「軽」については、15代応神天皇記に、「軽池」を造った記事、百済王からもらった馬を「軽の坂の上」の厩うまやで飼った「厩坂うまさか」の名も記されている。21代雄略天皇記には、「軽村」も見える。5～6世紀には、「軽の社」と呼ばれるところは、この地に複数あったと思われる。(剣池(軽池)傍の丘にある大歳神社(式内社、石川町)は、その一つか。)
- ・飛鳥時代、29代欽明天皇陵(見瀬丸山古墳)の直ぐ北側にあった「軽の社」(現・春日神社)に、軽寺を隣接して建てたと見られる。(軽寺跡から7世紀後半の瓦が出土、金堂、講堂の土壇が残る。)(天武天皇記に「軽寺に食封百戸を賜った」とある。)ここは、下ツ道沿いで交通の要衝であり、「軽の市」もできて賑わう。春日神社は、延喜式神名帳には記載されていない。(軽寺の一角と見られたか。)

○「思はぬを 思うと言わば

真鳥まどり棲すむ 雲梯うなての杜もりの 神し知らさむ」 (3100番)

(不想乎 想常云者 真鳥住 卯名手乃杜之 神思将御知)

(雲梯の杜の菅の根に寄せた歌も、巻7-1344 番に。)

- \*思ってもいないのに思っているなどと(嘘を)言えば、

恐ろしい鷲の棲む雲梯の杜の神様が見通して罰を下されることでしょう。

雲梯の杜

- ・河俣かわまた神社一檀原市雲梯町(旧・高市郡)(畝傍山の西側の地域)  
吉野郡大淀町・御所市地域から北流する曾我そが川の東岸に。
- ・「雲梯うなて」の地名は、「池溝・うなで」に由来する(崇神天皇が始める)と言われ、これは“農業用の水路”の意味。曾我川に灌漑用の支流を造った、その川が分かれるところに神社を建てた。川俣神社と呼ばれていた。(対岸南の、現・木葉神社がそれか。)この地は、葛城氏、後に蘇我氏の勢力地であったので、遅くとも6世紀初めには神社があったと見られる。
- ・天武天皇は、壬申の乱の時に神託を受けたことにより、事代主神ことしろぬしのかみ(出雲神話の大国主神の子)を祀るようになる。河俣神社は、この神を祀る時に移動したのか。「高市御県坐たけちのみあがたにいます鴨事代主神社」(皇室の直轄地)と呼ぶ。延喜式・神名帳には、『大社』として、「川俣神社」(小)と、両方が記載されている。

○ 「かくしてや なほやまもらむ

大荒木おほあらしきの 浮田うきたの杜もりの 標しめにあらなくに」(2839番)

(如是為哉 猶八戌牛鳴 大荒木之 浮田之杜之 標尔不有尔)

- \*このままずっと見守るだけでいなければならないのであろうか。私は(あなたは) にも大荒木の浮田の杜の立ち入りを禁じる標ではないのだけれど。

大荒木の浮田の杜

- ・荒木神社一五條市今井町(旧・宇智郡)(JR 和歌山線五條駅の北東)  
ここを、僧・契沖が、「浮田の杜」と比定した(「万葉代匠記」江戸初期)。
- ・「宇智うち」の地は、「葛上かづらきのかみ」(葛城山・金剛山の東側。葛城市、御所市)の南に接した地域で、北部には北宇智古墳群がある。宇智神社があるが創建は不明。荒木神社は、裏山の荒木山を御神体としていたか。  
6世紀後期、巨勢路(こせじ 御所市古瀬)から吉野川・紀の川へと繋がる紀路(紀伊路)が整備された頃から、知られるようになったと思われる。
- ・飛鳥時代、舒明天皇が「宇智の野」に遊猟された時の歌がある(3番歌)。  
神社の北西の広大な野であったとも見られている。(現・奈良カントリークラブの辺り)『式内社・小』として記載。

以上に見た「神社」は、万葉時代以前の5, 6世紀頃には既に、その地の人が、その土地を守護する神・産土うぶすな神として、または共同体の先祖神が宿ると信じて祭っていたところです。つまり、神話の神や伝説の英雄を祀るようになる以前から、この地に坐います神が、宿るところであったものです。

歌からは、そんな「神の杜」に一人で入って、神が聞いてくれていると感じて、自分の恋の悩みを打ち明け、呟いている、男または女の姿が想像されます。

これらの歌が作られたのは、飛鳥京～奈良(平城)京中期の時代ですが、この時期には、律令制のもとで、各地にある殆どの神社に対して社格や役割が決められ、朝廷の管理するところとなっていきます。新たに祭神が加わったり、有力氏族が新たに神社を建てることもします。そして、社殿や杜が整備されていきます。

しかし、詠み手たちは皆、神が座す社殿ではなく、神が宿る杜・木立を歌います。巨木が茂る昔の「神の杜」をイメージし、そこに身を置いて、“神に向かって歌っている”のだと思います。

其の訳は“恋心は人間の根原的なものだから、原初の「神様」が一番よく分かって下さるに違いない”と信じていた故である、と考えました。

それに、“今の神社は、畏れ多い神様が居て、立ち入りを禁じ、祝はふり(神職)が見守るので近づき難い”とも感じていた、と思われます。(巻4「相聞」・712番)

そして、“大和国のよく知られた神社を引き合いに出して、掛詞かけことばや喩えに用いると、他国の杜の神様も注目し、面白がって、我らの「歌」に耳を傾けて下さるに違いない”と期待していたのだと思います。

主な参考文献 ・伊藤博「萬葉集・釋注」集英社

・井手至・毛利正守「新校注・萬葉集」和泉書院

・宇治谷孟「日本書紀」全現代語訳 講談社学術文庫

・大和国延喜式一覧、「神社記憶」玄松子のHP、神社のHP

石上神宮



↓ 春日神社



↓ 河俣神社



↓ 荒木神社



(写真は、2013年10月～2019年4月に、各神社を訪ねた時のもの)